

〔報告〕

新型コロナウイルス禍の学内統合看護実習評価： シミュレーション教育を活用した看護技術演習の試み

大崎 真¹⁾，早坂 笑子¹⁾，松田 優二¹⁾，福原 彩花¹⁾，太田 晴美¹⁾

1) 東北文化学園大学医療福祉学部看護学科

要旨

A 大学の看護学科では、新型コロナウイルス感染症の影響のため4年次開講科目の統合看護実習で半数の学生が学内実習に切り替えざるを得ない状況となった。臨地実習における看護技術実践経験への代替を検討し、模擬患者や高機能シミュレーターを用いたシミュレーション演習による看護技術演習を実習内容に取り入れた。対象者に対して卒業前及び卒業後2ヶ月時点で調査したアンケート結果において、80%以上の学生及び卒業生が臨床のような経験ができたと答えていた。また、卒業生に対する臨床実践に役立つかという設問では全員が臨床実践に役立つと回答していた。以上より、シミュレーション教育を活用した看護技術演習は、臨床に近い体験を提供することができ、在学中の統合看護実習技術・知識の統合という目標の達成だけでなく、卒業後の看護実践に繋がる有意義な取り組みであることが示唆された。

【キーワード】新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)、統合看護実習、シミュレーション教育、看護技術演習

I. はじめに

シミュレーション教育を取り入れた看護教育は、近年多くの教育機関で用いられている。国内の看護学士課程におけるシミュレーション教育実態を調査した牧野 (2020) は、「自己の課題への気づきと、自己の能力維持・向上のための継続した取り組みの重要性への理解」「個別の対象者の特徴や状態を意識した援助の必要性への理解」「災害看護など各看護場面に特有な看護実践能力の必要性への理解と技術の獲得」といった学修効果報告があったと述べている。

A 大学看護学科では新型コロナウイルス感染症 (以下 COVID-19) の影響にて、2020年度の統合看護実習は臨地における実施は困難であり、学内実習とせざるを得ない状況であった。これらの経験から筆者ら (2021) は、学内実習の際 ICT

や教員の実践経験を効果的に活用することにより実習目標が達成できた。一方で、対面演習形式の実習ができない学びの限界として「看護技術やコミュニケーション等の臨床経験不足」が挙げられたと報告した。

2021年度の統合看護実習においても COVID-19の影響は継続しており、本科目履修生のおよそ半数の学生は臨地における実習が困難であり学内実習となった。そこで2021年度は臨床での看護技術実践経験に代替する教育方法を検討し、模擬患者や高機能シミュレーターを用いたシミュレーション教育を活用した看護技術演習を実習内容に取り入れた。

本取り組みに関する評価を行うため、筆者らは、実習終了後に本課題に参加した学生に対して卒業前後でアンケート調査を実施した。

本研究では、COVID-19影響下で行った学内統

合看護実習で、看護技術に関するシミュレーション教育の視点から、同実習における学生の学びと、卒業後の看護実践に繋がる教育効果について得られた知見を報告する。

II. 研究目的

本研究の目的は、学内統合看護実習でのシミュレーション教育を活用した看護技術演習導入による看護学生の学びと、臨床での看護実践状況から、本取り組みの教育的な意義について示唆を得ることである。

III. 研究方法

1. 研究対象

A 大学看護学科において、2021年度統合看護実習を学内で行った4年次生39名のうち、研究に同意と回答が得られた学生及び卒業生を対象とした。研究参加の協力を依頼する際、調査は2段階調査（同一の対象者に卒業前の3月の調査および卒業後2カ月時点での追跡調査）がある旨を説明し、同意が得られた者を対象者とした。

2. データ収集方法

1) 収集方法

卒業前（3月）および卒業後（実習終了後から約1年後の6月）に研究参加の同意が得られた同一の対象者へ Google Forms[®]を利用した無記名

アンケートで行い、自由意思による回答とした。

2) 主な質問事項

アンケートは、筆者らが4つの観点で作成した。主な質問項目と内容は後述する表1の通りであり、卒業前と卒業後の状況を比較できるような内容とした。その他として自由記述欄を設けた。

3. データ収集期間

- 1) 卒業前：2022年3月14日～3月31日
- 2) 卒業後：2022年6月3日～6月24日

4. データ分析方法

選択項目は単純集計し、自由記述は類似する内容を研究者間で検討し、選択項目と合わせて分析した。

5. 倫理的配慮

本研究は、実習から6か月以上経過し、成績が確定した学生に対して Google Forms[®]を用いて実施した。研究協力依頼書を用いて、①個人が特定されることはないこと、②成績には一切の関係がないこと、③回答は自由意思で断っても不利益がないこと、④調査目的・内容を理解し提出をもって同意とみなすこと、⑤データはパスワードをかけたロック付きの保存媒体（USBメモリ等）に保存すること、⑥データは質問対応のため5年間は研究代表者研究室の鍵のかかる書庫に保管し、5年後に粉碎破断すること、⑦結果は看護系学会で公表することを説明した。なお、本調査は東北文化

表1 アンケート内容

項目	卒業前	卒業後
1. 看護技術演習内で経験した看護技術 [※]	・ 看護技術演習の中で実施できた内容を全て教えてください	・ 実施した看護技術の中で、 <u>現在も役立っているものを</u> 全て教えてください
2. 看護技術演習において役立った学修方法 [※]	・ 看護技術演習の学修において役立った事柄を全て教えてください	・ 看護技術演習の学修において <u>現在も役立っている事柄</u> を全て教えてください
3. 看護技術演習の臨床に近い経験 ^{※※}	・ 看護技術演習は実際に臨床で看護実践しているような経験ができましたか	・ 看護技術演習は実際に臨床で看護実践しているような <u>経験</u> ができていたと思いますか
4-1. 看護技術の振り返り ^{※※}	・ 看護技術演習を通して看護技術の振り返りができたか	—
4-2. 看護技術演習の臨床実践への影響 ^{※※}	—	・ 看護技術演習は臨床での看護技術実践に役立つと思いますか

※ 選択式（複数回答可）、※※4肢択一式

学園大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した。(承認番号；文大倫第21-26号)。なお、開示すべき COI 関係はない。

IV. 看護技術演習の概要

統合看護実習の目標として、「対象者へのケア実践、知識と技術の統合」がある。看護技術演習は今回の学内統合看護実習における「臨地実習にて得られる看護技術実践経験に代替する学び」を得ることで前述の目標を達成できるよう、統合看護実習の一部として実施した。

1. 演習目的

シミュレーション教育を活用した看護技術演習での実践経験を通して、ケア実践に必要な知識と技術の統合を図る

2. 演習目標

フィジカルアセスメントを踏まえて患者の個性を考慮した看護技術を実施できる

3. 演習構成

事前学習含む導入、シミュレーション実技演習の実践、振り返りの全3回構成で実施した。

1) 導入

(1) オリエンテーション

オリエンテーションでは、学生への動機付けのため演習概要資料を提示し、本課題の目標を学生と共有した。特に臨地実習との違いであるシミュレーション演習の留意点を、実際のシミュレーター等を用いて強調し説明した。

(2) 実技演習事例の提示

事例は臨地実習状況を想定し、筆者らが作成した。

学生の自己学習を促すため、下記に関する内容の資料を提示した。

①シナリオテーマ

心不全患者に対するフィジカルアセスメントと車椅子移乗・移送技術の実践

②シナリオ(患者概要)

A 氏70代女性、診断名：慢性心不全。心負荷

増大に伴う内科的治療目的で入院。入院より安静・薬物・酸素療法を行い状態は改善してきている。現在入院から10日間経過しており、安静療法(トイレ歩行制限)と薬物療法(内服調整中)を行っている。日常生活動作は自立している。

(3) 自己学修

オリエンテーション後、実習室を自由に使用できる時間を設け、看護技術の練習や知識の学習など学生のレディネスに応じた自己学修を促した。

2) シミュレーション実技演習

学生1名あたり実施15分、個別の振り返りを10分としてシナリオベースの実技演習を行った。学生には当日朝に後述の課題文(対象者に対するフィジカルアセスメントの実施、医療者への報告、車椅子への移乗・移送)を提示し、必要物品の準備から実践、後片付けまで、実際の臨地実習を想定し実施した。

【課題文】

本日は受け持ちから3日目です。9時半(実技演習開始時刻から30分後)からレントゲン室で胸部レントゲン撮影が予定されています。これから受け持ち患者の全身状態の観察を行い、必要な検査介助を実施してください。看護援助終了後、実習指導者(教員)へ報告を行ってください。

実技終了直後の個別振り返りでは、①学生から実施してみてどうだったか、②模擬患者からのコメント、③教員からのフィードバックを行った。限られた時間の中で複数名の教員が一定のフィードバックが行えるよう、筆者が作成した看護技術演習評価資料を用いて、PNP法(positive negative -positive)を活用した。

3) 実施学生全体での振り返り(後日)

学生全体での振り返りでは、導入として主担当教員が本課題の目的・目標に関して全体的な振り返りを行なったのち、4年次生という学生のレディネスを考慮して学生同士での学びの共有時間

を設定した。学生はそれぞれ得た学びを共有しながら、疑問点を担当教員に質問するなど、学びを深めていた。

4. 演習実施環境

1) 使用教材

実技演習を行う実習室を2教室(個別に実技演習を行う教室、学生控室として自由に準備や練習が行える教室)確保した。また、臨床環境を再現できるように基本的なベッドなどに加え、高機能シミュレーターを用いて、異常呼吸音などの再現を行った。(以下写真1、2)



写真1 実技演習のため病室を模した実習室



写真2 実技演習のため病室を模した実習室

2) 教員配置

指導を担当する教員は、模擬患者役1名、実習指導者役1名、ファシリテーター1名配置した。技術演習の指導にあたっては、前述の通り、演習計画と評価指標を用いて教員間で共通認識を持って指導した。

V. 結果

Google Forms[®]による無記名アンケート調査を実施した。アンケートの回収率は、卒業前:34名(回収率87.2%)、卒業後:20名(回収率51.3%)であった。

1. 看護技術演習内で経験した看護技術

看護技術演習内で提示した4つの看護技術(バイタルサイン測定、フィジカルアセスメント、移乗・移送、医療者への報告)のうち、実施できた看護技術として、卒業前は全ての演習項目を実施できたと回答していた(複数回答)。中でもバイタルサイン測定とフィジカルアセスメント、医療者への報告は90%以上の学生が実施できていた(図1)。卒業後の「看護技術演習で実施した技術の中で現在も役立っている技術」についての設問では、バイタルサイン測定は卒業前と同様に95%の卒業生が役立ったと回答していた(複数回答)。一方で卒業前は90%以上が実施できたと回答していたフィジカルアセスメントや医療者への報告含め3項目は55%と、現在役立っている看護技術は半数という回答であった(図2)。

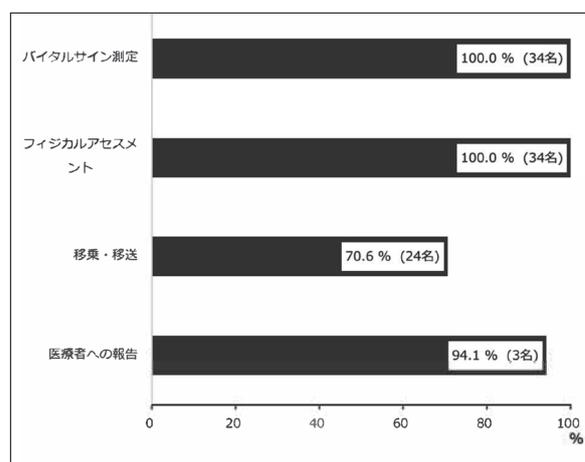


図1 【卒業前】看護技術演習で実施できた技術 (複数回答可) n=34

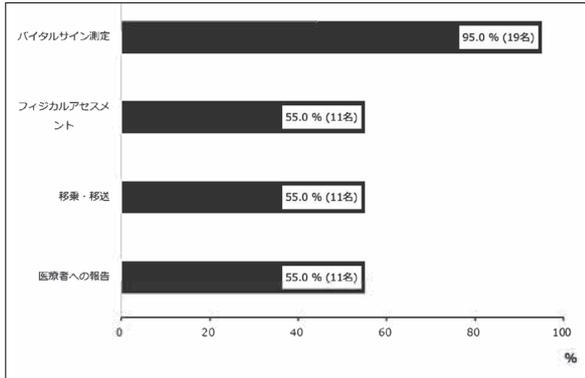


図2 【卒業後】看護技術演習で実施した技術の中で現在も役立つ技術（複数回答可） n=20

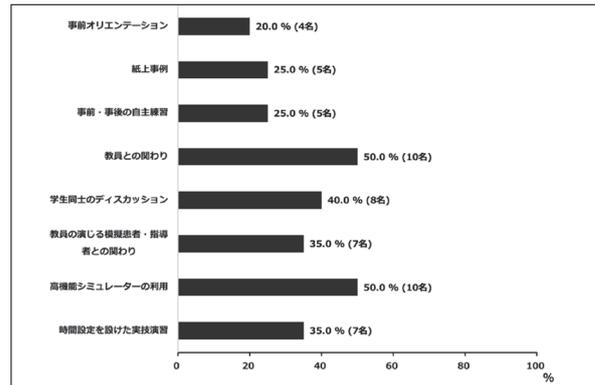


図4 【卒業後】看護技術演習で現在も役立つ学修方法（複数回答可） n=20

2. 看護技術演習において役立つ学修方法

看護技術演習の目的・目標達成を問う設問として「看護技術演習において役立つ学修方法」は、模擬患者・指導者との関わりが最も多く、次いで学生同士の関わり、教員との関わり、シミュレーターの利用、自主練習と回答していた（複数回答、図3）。

卒業生への「看護技術演習の学修において現在も役立つ学修方法」についての設問では、全ての項目について現在も役立つと回答していた（複数回答）。中でも教員との関わりとシミュレーターの利用が最も多く、次いで学生同士の関わり、模擬患者・指導者との関わり、時間設定を設けた実技演習であった（図4）。

しかし、卒業前と比較し全体として回答数は少なく、最も多い回答でも50%という回答状況であった。また卒業前は最も回答の多かった模擬患者・指導者との関わりは35%に留まっていた。

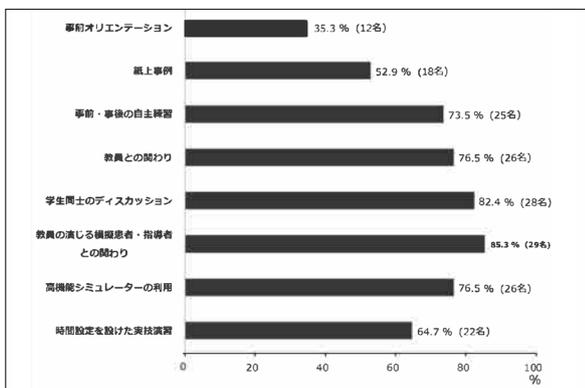


図3 【卒業前】看護技術演習で役立つ学修方法（複数回答可） n=34

3. 看護技術演習の臨床に近い経験

看護技術演習は「臨床で実践しているような経験ができたか」という設問に対し、卒業前は大いにできた17%（8名）、できた65%（30名）、あまりできなかった9%（4名）、できなかった9%（4名）であった（図5）。

卒業後の看護技術演習は「臨床で実践しているような経験ができていたと思うか」という設問では、大いにできていた15%（4名）、できていた69%（18名）、あまりできていなかった8%（2名）、できていなかった8%（2名）であった（図6）。

回答数に違いはあるが、割合は卒業前も卒業後も同様の傾向を示しており、80%以上の学生・卒業生が卒業時だけでなく臨床実践している中でも、臨床のような経験ができたと回答していた。

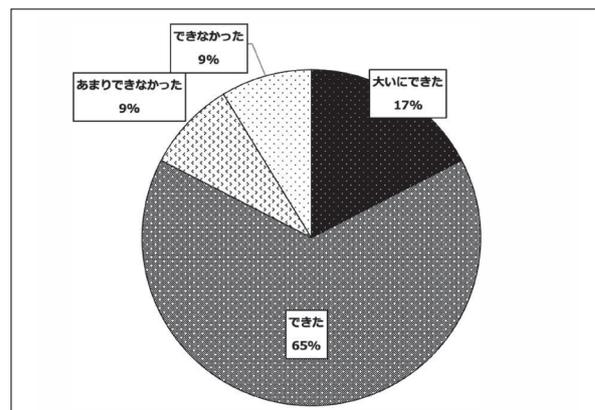


図5 【卒業前】臨床で実践しているような経験ができたか n=34

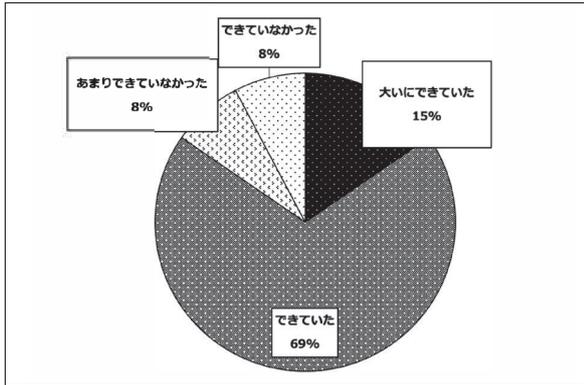


図6 【卒業後】臨床で実践しているような経験ができていたか n=20

4-1. 看護技術の振り返り(卒業前)

演習目標評価につながる「看護技術演習を通して看護技術の振り返りができたか」という項目では、大いにできた24% (11名)、できた72% (33名)、あまりできなかつた2% (1名)で、できなかつた2% (1名)であった(図7)。ほとんどの学生が看護技術の振り返りができたと回答していた。

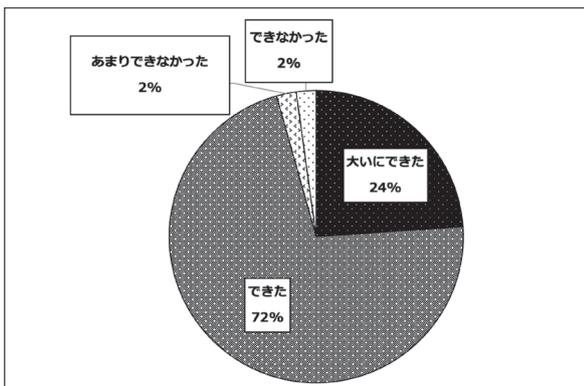


図7 【卒業前】看護技術の振り返りができたか n=34

4-2. 看護技術演習の臨床実践への影響(卒業後)

卒業生に対する「看護技術演習は臨床実践に役立つか」という項目では、大いに役立つ20% (4名)、役立つ80% (16名)であり、あまり役立つ・役立つとの回答はなく、全ての回答者が看護技術演習は臨床実践に役立つと回答していた(図8)。

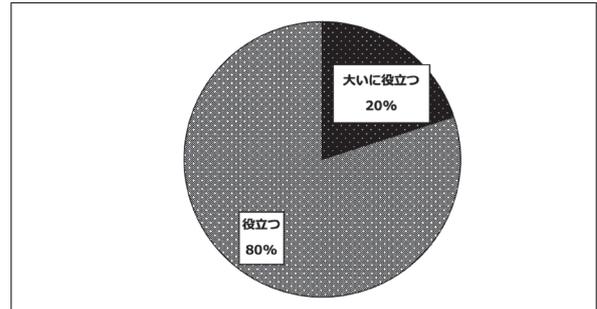


図8 【卒業後】技術演習は臨床実践に役立つと思うか n=20

5. 自由記載内容

1) 卒業前

9名の学生が自由記述を記載していた。そのうち5名の学生は『実際の実習の様な設定で、緊張感もあり自分の為になったと思う』『模擬患者さんに実際に看護援助をするというのは、とってもためになった。病院実習により近いもので、有意義に学習をすることができた』と臨地実習に近い経験ができたと回答していた。また、『改めて看護技術を行ったことで、自分の課題点を知ることができた』『フィジカルアセスメントの基本をしっかりと勉強することで様々な看護に繋がることをとても実感しました』と看護技術や知識に関する学びとなったと2名の学生が述べていた。さらに『看護技術実習では病院実習ではできないようなこと(たくさんの教員がいるため分からないところを相談しやすかった、人間のモデルを使うことができる為何度も技術を確認することができた)をしっかりと学ぶことができました』とシミュレーション教育に関する意見も挙げられていた。

2) 卒業後

4名の卒業生が自由記述を記載していた。『実習で行っていたことが実際の現場でも役立つ場面が多いのでたくさん取り入れた方が良いと思う』という看護技術演習の教育効果への直接的な意見や『紙上事例での疾患は心疾患がメインであったが、事例展開の後に学生同士でディスカッションをして観察項目や行えた看護について情報共有できるとさらに理解が深まると感じました』と学生同士の関わりに関する意見が挙げられていた。

VI. 考察

1. 統合看護実習目標に対する取り組みの評価

今回の学内統合看護実習では、対象者へのケア実践、知識と技術の統合という実習目標を臨地実習と同様に達成できるよう、シミュレーション教育を活用した教育実践を試みた。

卒業前に統合看護実習を振り返ったアンケート結果では、実習終了から半年以上が経過しても実践内容を認識し、役立ったと回答していた。今回の演習では教員の臨床経験を活かしたシナリオの作成や臨地実習で想定される看護実践、そして個別の振り返りと全体の振り返り機会の確保といった演習構成となるよう工夫した。高山ら(2016)が「教員は、シナリオを作成し、患者状況や環境をリアルに再現する。学生は、時間制限のある中で、看護実践の一場面を実際に展開する。学生はわかることとできることの違いを肌で感じ、デブリーフィングによって、知識と技術を統合させ、自分自身の課題を認識していく」と述べているように、今回の看護技術演習の取り組みは、学生にとって統合看護実習の目標を達成する上で有意義な演習構成であったと考えられる。自由記載内容から『改めて看護技術を行ったことで、自分の課題点を知ることができた』『フィジカルアセスメントの基本をしっかりと勉強することで様々な看護に繋がることをとても実感しました』との回答から、統合看護実習の目標である知識と技術の統合という点における学修の動機付けに効果があったと考えられる。

東出ら(2021)と高橋ら(2021)は、COVID-19の影響によって学内実習に切り替わった状況においても、模擬患者の導入など実習内容・構成の工夫により臨地実習と同様の目標を達成できたことと学内実習効果に関する報告をしている。本研究結果からも同様に模擬患者の活用など実習環境を調整することで、より効果的な学修機会を提供でき、実習目標を達成できたと考えられる。加えて、紙上事例だけでなく教員や学生同士といった他者と

の関わりを通して看護技術を学ぶことができた。COVID-19の影響により臨地での実習ができない状況下であったが、学内で対面してシミュレーションを取り入れた実習の意義があったと捉えることができる。

以上より、看護技術演習の実践は、学生が統合看護実習の技術・知識の統合という目標を達成する上で有意義な学びの機会となっていたと言える。

2. 卒業後の臨床実践における取り組みの評価

実習から1年後、卒業後2ヶ月時点の教育効果について学生の回答状況から、看護技術演習の実践で得た経験は、新人看護師が看護技術を実践する上で有意義な学びの機会に繋がっていたと示唆された。

今回のアンケート結果では、看護技術の中でも特にバイタルサイン測定が役立っていると示された。これは菖蒲澤ら(2016)の新人看護師の入職からおよそ半年後の看護技術到達状況として「バイタルサインの観察は92.9%の看護師が経験している」という報告の通り、現在行っている看護技術実践状況を反映した結果と推測できる。同時に、多くの学生にとって最後の実習である統合看護実習において課した看護技術が、新人看護師にとって直面するタイムリーなスキルであったと言える。また、全ての回答者が看護技術演習を臨床での看護実践に役立っていると回答しており、自由記載において『実習で行っていたことが実際の現場でも役立つ場面が多いのでたくさん取り入れた方が良いと思う』との回答から、看護技術演習で得られた学びは少なくとも卒業後2ヶ月の時点において、臨床で直面する統合的な看護技術課題として有意義な経験であったと言える。

一方で、卒業後の図2・4の回答数が同調査項目図1・3と比較したとき、全体として回答数が少ない。その要因として調査対象者の卒業に伴う環境の変化(大学で実習時に対応していた教員と離れた、看護師として勤務が開始されていることなど)が大きく影響していると考えられる。環境

の変化に伴い、記憶が薄れてしまうことにより回答数減少に至っていると考えられる。図2に示す「フィジカルアセスメント、移乗・移送、医療者への報告が役立っていると回答している者が約半数」という結果については、要因の一つとして看護技術演習において全ての学生が移乗・移送の技術実践まで到達していたわけではないことが考えられる。今回の演習において技術実践はバイタルサイン測定、フィジカルアセスメントののち指導者への報告、そして移乗・移送技術の実践を行う演習であった。図1に示す通り、移乗・移送の技術まで到達しなかった学生が3割程度であったことから、実施していない看護技術については特に、学修の経験として印象に残りにくい学びである可能性が考えられる。そのほかの要因としては、対象者の臨床における看護技術実践状況が影響している可能性が予測されるため、詳細な分析には対象者の背景を考慮した調査が必要である。反対に環境の変化を伴う状況下であっても、図2に示す通り半数以上の対象者は全ての看護技術項目で現在も「役立っている」と回答しており、本演習の取り組みの効果として新人看護師の看護実践に影響を与えていると評価できる。

図4に示す看護技術演習の構成要素に関しては、前述と同様に全体的な回答数の減少が見られ、卒業前と比較した時模擬患者や指導者との関わりの割合が少ないなど相違点があった。しかし1つの項目として「役立たない」といった学修方法はなく、卒業前と同様に全ての項目において「役立っていた」と回答が得られており、新人看護師の看護実践に対しても一定の効果がある学修方法であると考えられる。

以上より、学内統合看護実習の看護技術演習の実践は、新人看護師の看護実践に繋がる有意義な学びであることが示唆された。

3. シミュレーション教育を活用した看護技術演習の意義

今回の看護技術演習の取り組みは、臨地実習で学ぶ内容を再現するという目的のもとシミュレー

ション教育を活用して行った。

シミュレーション教育における学びを図る設問の実際に臨床で看護を実践している経験ができたか(できていたと思うか)という問いに、卒業前・卒業後ともに80%以上が「できた」と回答している。学生は統合看護実習の前に領域別実習を臨地で経験しており、2ヶ月程度臨床実践経験のある卒業生も同様の割合での回答結果となったことから、シミュレーション教育を活用した看護技術演習の実践は、臨床体験に代替できる教育の学びが得られたと考える。

また自由記載において『看護技術実習では病院実習ではできないようなこと(たくさんの教員がいるため分からないところを相談しやすかった、人間のモデルを使うことができる為何度も技術を確認することができた)をしっかり学ぶことができました』とシミュレーション教育に関する意見があった。これはシミュレーション教育特有の学修効果であり、臨地実習とは異なった学修機会となったと思われる。一方で今井ら(2020)はシミュレーション教育の看護技術実践に関して「単なるフィジカルアセスメントの手技の習得だけでなく、実際に患者に実践する実感を持ち、状況に合わせた具体的な援助を考えることに繋がっていたと考える。」と技術習得のみではないと述べている。今回の看護技術演習では、図1に示す通り3割程度の学生が移乗・移送の技術実践に至らなかった。学生は、これまでの在学中の学びで看護技術を行った後、ケア実践の評価として考えること、指導者に報告すること、次に行く援助の準備と、一つずつ時間をかけて実施してきている。統合看護実習では、臨床実践を想定し一連の流れを行えるよう、実施時間を設定した。学生は一つ一つの技術をアセスメントしながら、個別性を踏まえた看護実践を展開し、報告していた。これらの実践過程は丁寧に実施する、考えるという意味では評価できるが、臨床実践を想定したとき、アセスメントして報告する力、そして行動に移し実践する力が必要と言える。

今回の演習構成の15分の実施時間では7割程度の学生が全ての看護技術を実施できていた。全体として時間設定を考える上では、実施する学生のレディネスに合わせることで、そして新人看護師として必要な到達基準に合わせた妥当な時間設定の検討が必要である。一方で前述の通り医療者への報告を含めたアセスメントを9割以上の学生が実施できていたことと、自由記載においても『実際の実習の様な設定で、緊張感もあり自分の為になったと思う』『模擬患者さんに実際に看護援助をするというのは、とってもためになった。病院実習により近いもので、有意義に学習をすることができた』との回答から、臨床で求められるアセスメント力をトレーニングするための学修機会となっていたと考えられる。

また今井ら(2020)は同報告において「シミュレータを用いたシミュレーション教育においても、この経験学習理論のサイクルをふまえ、効果的なアクティブラーニングが実施できるよう学習設計を行っていく必要性が示唆された。」と述べている。今回の演習構成として、導入、実技課題の実施、フィードバック時間と自主学習及び多様な実践経験を持つ教員への質疑応答機会といった構成で十分な学習時間を確保したことが、学生の能動的な学習を促したと考えられる。

一方で、卒業前・卒業後のそれぞれ1割程度の回答者が「臨床で看護を実践しているような経験があまりできなかった」という状況は検討が必要である。その要因として、シミュレーション演習の学修環境が考えられる。今回の演習課題は、模擬患者役を普段関わりのある教員が担っており、実施場所も日頃使い慣れている実習室、シミュレーション演習課題の際に複数の教員が存在する状況、演習課題自体の時間的な制約など、臨地実習の状況とは大きく相違があった。

看護学において臨地実習で得られる学びは、学内実習で完全に代替できるものではない。シミュレーション教育の現状と課題に関して「シミュレーション演習の効果を確認する、シミュレー

ション演習の方法を検討・改善する、教員の技術の向上が挙げられていた。」(牧野, 2020)と報告されているように、学内実習においてシミュレーション教育を活用する場合は、シミュレーション教育の特性を十分に理解した上で効果的に活用する必要がある。

以上より、学内統合看護実習の看護技術演習シミュレーション教育実践は、臨地実習に近い学びの経験となり、卒業後の看護技術実践にも繋がる効果的な取り組みであったと言える。また、シミュレーション教育の効果的な活用により、臨地実習とは異なる経験が期待できると示唆された。

Ⅶ．結論

シミュレーション教育を活用した看護技術演習は、学生に臨床に近い体験を提供することができ、統合看護実習の技術・知識の統合という目標を達成する上で効果的な取り組みと言える。

また、卒業後の新人看護師にとっても臨床で直面する統合的な看護技術として有意義な経験であり、統合看護実習でのシミュレーション教育は臨床実践においても有意義な教授方法であると示唆された。

Ⅷ．研究の限界

今回の調査は、卒業時と卒業後2ヶ月時点での調査結果であり、卒業後の継続した学修効果の測定を評価するための十分なデータとはいえない。継続した学修効果を測定するためには、調査対象者の背景を考慮し、サンプル数の確保など継続的な調査を行う必要がある。

また、本研究は臨地実習と学内実習との学生の学びを直接的に比較検討したものではない。自由記載の肯定的な意見を踏まえつつ、シミュレーション教育を活用した効果的な活用方法について引き続き検討する必要がある。

引用文献

- 東出郁子, 西澤恵美子, 原恭子, 他 (2021). 新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴う学内実習の効果と課題—小児看護学実習, 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要, 13, 64-69.
- 今井秀人, 中山由美, 舟木友美, 他 (2020). 看護学生を対象としたシミュレータを用いたシミュレーション教育の学習効果、課題に関する国内文献レビュー, 摂南大学看護学研究, vol.8, no.1, 46-54.
- 牧野美幸 (2020). 看護学士課程におけるシミュレーション教育の実際と課題, 淑大看護紀要, Vol.12, 7-18.
- 太田晴美, 大崎真, 早坂笑子 (2021). 新型コロナウイルス渦の学内統合看護実習評価—学生アンケート結果から—, 東北文化学園大学看護学科紀要, 第10巻, 第1号, 27-42.
- 菖蒲澤幸子, 及川千香子, 目時のり, 他 (2016). A病院新人看護職員の1年間の看護技術の到達状況, 日本赤十字秋田看護大学紀要, 21号, 23-30.
- 高橋有里, 井上都之, 三浦奈都子, 他 (2022). 新型コロナウイルス感染症拡大に伴い実施した基礎看護学実習Ⅰの代替学内実習の実際とその評価, 岩手県立大学看護学部紀要, 24, 61-81.
- 高山詩穂, 山田恵子, 滝恵津, 他 (2016). わが国の看護大学における 状況設定シミュレーションの現状と課題, 聖徳大学研究紀要, 第27号, 89-94.